菊池 短歌会

月詠草

なぎて どしや降りの雨が川幅押し拡げ濁流さかまく葦群 の名の容易に出ざる眼先にカラー 岩木 本凛と真 妙子白 百枝

梅雨霧の 平安 黒田 衣子水滴も藍色に染め紫陽花の濡るるがままの今日のの遠のく 見る間に湖を包みこみ山ほととぎすの声

眠れねば呪文の如く繰り返す二つ足らざる秋の七 佐々木かつえ

の声 頬じろに生まれて啼けば透明に青野八丁統ぶるそ 一所明かれば山鳩が鳴竹野美智代

なが雨 0 雫残るも梅雨空の 中原ちえ子

放くる 山下 菊代体耕の田畑荒れゆく寂しさをわが責のごと畦に見もさわやかに 村上 咲江もさわの花の水いろ井出添ひをのぼる朝寺の身

万 句 の 里 句 会 句

不意の客!

スピー

ドは耕耘機なみ

ちょうどドラマのよかところ

尻田倉

非常口までカギかくる

梅雨晴間庭一面の乾し場かな偲ぶ風生れて親しき古団扇のと見れば足元に二三ねじり花 の昔を今に蓮ひらく り花

中松茨富林宫平北加田隈野路永木田,本山村藤島部中 田 ま ま つ 雅 邦 子 子 子 幸子 妙房輝公子子枝 妙子

郁 久子

肥 後狂 句桜会 例会 選句集

太芹狩須小田川野藤川 水 安 田谷 武 中 のり子 本六 新 繁生 美 孝幸 雄三

> 用心深さ 登下校にもガードマン 東田窪高 栄 浩 明 新 次 風 徳 米

泗 短

もしく見つ 大ジョッキ杯を重ねる息子の姿たしなめつつも頼

増田久美子

大輪の ころころと次々掘り出す馬鈴薯に笑くぼもありぬ らす あばたもありぬ 八重梔子 のあまた咲き梅雨に沈みわが庭照 大島 髙藤タツノ きと

花登る 意のままに自 生の南瓜庭を占め木の花のごと黄の

水張田を茜に染めて今沈む夕陽水面に照り合う茜

りゆらげり何時の間に田は 植は済み か 望の早苗は風にそよ

せ らぎ俳句会 7 月 例会

ほいっぴゃあ うち食うくせに痩せたがるめんどくしゃ まとめ買いしてうっちょこう

好 三

茶水

梅雨の夜部屋はじめじめむし暑い ったりと泳ぐ金魚に声をかけ りったりと泳ぐ金魚に声をかけ がきりにはなほ白百合の香り濃し 対遺香確かと身につけ草むしる がきりにはなる。 がきりましる。 がもりましる。 がもりる。 がもり。 がもり。 がもり。 がもりる。 がもり。 がもり。 がもり。 がもり。 がもり。 がもりる。 がもり。 はりる。 はり。 干鱈は幼き頃の盆の味生活流に為す術もなく梅雨荒るる絵団扇も添へて届きし御中元 俳句には夏枯れなしとのたまえる

中一 渡辺

飛びたつ

つぎ

中二 渡辺 一史

藤村五本山丁 藤本 坂内本村 寺 服本 部

とつぜんの夕立が来てびしょぬれだ

七城短歌会 7月詠草

撫幸青 奉仕作業で覚えたる鎌研ぎ上げて刃を指 るもよし鞍岳を望むは今なり車を止 木下 陽子

雲海に浮か 巣立ちをばしきりに促す親燕最後の雛が蹴るがにめる 岩津 涼子 ベ

クラス会今年の出会い約せしに永別二人の友の名に咲ける 吉間 充子 花菖蒲ことさら賞でゐし友逝きて十 吉間 充子

を宣ぶ 岩崎 清継

震撃 雲切れて夕日に明るくなりし庭梅雨の夕晴れ閃く ずら 岩崎 照代がら 岩崎 照代がら 岩崎 照代がら 岩崎 照代 掘りし馬鈴薯笊器を腰に抱え出す畑土塊に躓きな掘りし馬鈴薯笊器を腰に抱え出す畑土塊に躓きな 道子

が始まる 鞍岳の近くに日昇り我が郷はあまねく光にひと日

朝ごとにご先祖様に請い願う弱り し脚を癒し給え

13 | 広報きくち | 2006 SEPTEMBER-1 |

ほいっぴゃあ 穴場には居るカブトムめんどくしゃ 別れた方が早ばいためんどくしゃ 辞典はいらんカナで書めんどくしゃ 辞典はいらんカナで書まちっと 値切る代りに加てとって

がまじゃた体つん曲がり

美三五水江英

由代女光彩坊

欲と二人で詰め込ます

肥

後狂句

水笑会

7

月

旭志文芸俳句会 月詠草

トマト、オクラ、息の収穫を供えけ種播いてトマト日記の始まりぬ早苗田に山影こゆし雲うかべ 梅雨雷におびえて哭くやペット犬虹懸けて男晴れする青き山 防人の歌碑に青嵐鞠智城 夏草の伸びて鎌研ぐ朝しじま 吾子の手につぶれしイチゴ香り良し 孫田植え苗がよく出来植え方も オクラ、息の収穫を供えけり 田みとり出るとり

